

阿片に関する上海国際会議の報告(田原良純)

薬学雑誌 1909 年度 492 頁

アヘン戦争から 67 年、清は国民の阿片中毒に難儀していた。それを見かねた正義漢アメリカの主唱で 13 か国 35 人が明治 42 年 2 月、米人経営のパレースホテルに集まる。ほとんどが外交官、事務官であったが、日本代表は宮岡法学士、高木医学士(台湾医学校長)、田原薬学博士の 3 人。

会議はまず 1 日に 3 か国ずつ自国の阿片事情について報告、討議した。問題の支那は阿片を飲むもの 1,345 万人もいて、年間 1,022 万貫も消費しており、半数はイギリスがインドから持ち込んでいた。1906 年に今後 10 年で阿片を禁止するという大詔が発せられたものの、イギリスが売るものは条約上やめさせられない。一方イギリスは、インド統治の大財源だからやめたくはない。しかし世界の世論が逆風のため、支那の国内生産を禁ずるという条件で 3 年間だけ 10 分の 1 ずつ輸出を減らし、3 年後に再交渉することを決定した。

我が国は安政 5 年に井伊直弼が英国と条約を結ぶ時に、阿片を輸入してはならないとしたから助かった。日本領となっ

た台湾は、それまでの中毒者に鑑札を渡し、専売制度にして治療を奨励したから服用者は毎年 8 千人ずつ減っている。と報告したので各国の評判も良かった。

しかし支那の委員が、近年この国で阿片のかわりに流行し始めたモルヒネ注射や戒煙剤(モルヒネを含む)の多くが日本から輸出されていると各国に訴えたため、薬業者の代表でもある田原は肩身の狭い思いをしたようだ。

田原は会期中、上海に多くあった吸煙館を見に行っていた。「隣室に入ったら 100 人ばかりも居りました。皆、台の上に 1 組 2 人宛向かい合って臥て居て、その顔と顔の間に小さいランプがあって阿片の煙管を持って横になりながらチウチウ吸って居る。中には愉快そうに寝ている奴もあり、また眼が醒めているのもあり…」

支那はこの煙館を片端から閉鎖することにしたのだが、外国の居留地は権力が及ばぬから頼むより仕方がない。英米は早速応じたが、フランス租界は熱心でなかったので「フランスは少し面目を失った様に見えました」。記事は 4 月の総会学術演説会の要旨であるためか、珍しく口語文である。

小林 力